

⑫ 公開特許公報 (A)

昭60-165902

⑬ Int. Cl.

A 45 D 44/22  
A 61 K 7/00

識別記号

庁内整理番号

6671-3B  
7306-4C

⑭ 公開 昭和60年(1985)8月29日

審査請求 未請求 発明の数 5 (全5頁)

⑮ 発明の名称 美容バック材、その製法及び使用方法

⑯ 特 願 昭59-21965

⑰ 出 願 昭59(1984)2月10日

⑱ 発 明 者 階

久 雄

東京都千代田区有楽町1丁目1番2号 旭化成工業株式会  
社内

⑲ 出 願 人 旭化成工業株式会社

大阪市北区堂島浜1丁目2番6号

⑳ 代 理 人 弁理士 鈴木 定子

明 細 書

1. 発明の名称

美容バック材、その製法及び使用方法

2. 特許請求の範囲

(1) 一方の面に、皮膚に無害な糊料の乾燥した薄層或いは該糊料の微粉末の分散した薄層を設けた柔軟なフィルムであって、人体顔面の両目、鼻孔部及び口唇部に該当する相互配置より拡大された相互配置を保って穿孔を設け、これらの穿孔が両目、鼻孔部及び口唇部のそれぞれの開口部又は裂部より大きい美容バック材。

(2) フィルムが、繊維を紙状に絡ましてなる薄い不織布の空隙に皮膚に無害な糊料の微粉末が分散している柔軟なフィルムである特許請求の範囲第1項に記載する美容バック材。

(3) 一方の面に、皮膚に無害な糊料の乾燥した薄層或いは該糊料の微粉末の分散した薄層を設けた柔軟なフィルムに、人体顔面の両目、鼻孔部及び口唇部に該当する相互配置より拡大された相互配置を保って穿孔を設け、これらの穿孔が両目、鼻

孔部及び口唇部のそれぞれの開口部又は裂部より大きい美容バック材であって、

該美容バック材が顔面全体を被覆できない大きさに切断され、両目、鼻孔部及び口唇部のそれぞれの周辺の少なくとも1箇所が被覆されない局部用美容バック材。

(4) 柔軟なフィルムの一方の面に、親水性糊料の水溶液を塗布乾燥した後、人体顔面の両目、鼻孔部及び口唇部のそれぞれの開口部又は裂部より大きい穿孔を、両目、鼻孔部及び口唇部に該当する相互配置より拡大された相互配置を保って穿設する美容バック材の製法。

(5) 皮膚に無害な親油性及び親水性を併有する糊料の非水溶液に、皮膚に無害な親水性糊料の微粉末を懸濁させた非水溶液を、柔軟なフィルムの一方の面に塗布乾燥した後、人体顔面の両目、鼻孔部及び口唇部のそれぞれの開口部又は裂部より大きい穿孔を、両目、鼻孔部及び口唇部に該当する相互配置より拡大された相互配置を保って穿設する美容バック材の製法。

(6) 一方の面に、皮膚に無害な糊料の乾燥した薄層或いは糊料の微粉末の分散した薄層を設けた柔軟なフィルムを、濡らして顔面に、或いは濡らした顔面に、或いは有効成分を塗布した顔面に密着させて一定時間放置した後、剝離する美容バック材の使用法。

### 3. 発明の詳細な説明

本発明は既製のフィルムの両目、鼻孔部及び口唇部に該当する部位に穿孔を設け、皮膚に無害な乾燥した糊料の薄層を設けた柔軟なフィルムを濡らして顔面に、或いは濡らした顔面に、密着させる美容バック材、その製法及びその使用方法に関する。

従来から美容法として、肌にバック料を塗布する美容法が行われていた。このバック美容法は肌のたるみを引き締め、皮膚表面の汚れを吸着除去し、肌を滑らかにする皮膚調整用の基礎化粧品であり、他のどの化粧品を使った場合と比較しても、バック料が皮膚を覆う層は緻密で、透過性が小さいのである。したがって、空気は遮断され、皮膚

表面から絶えず分泌されている皮脂成分は空気酸化を受けることなく、この層の下に蓄積され、これが表皮を潤軟にする。又、細胞間隙や皮孔を広げてバック料の有効成分の吸収を促すことになる。しかもこの際、その部分の皮膚の温度が昇るために血行やリンパ液の循環が盛んになるので、皮膚機能が促進され、気孔や毛孔の拡大に伴って老廃物や垢が除り去られる。

したがって、バック美容法は最も効果的な美容法であると共に、最後に洗顔を行った後の爽快感は格別である。

バック美容法はこのように卓越した効果があるため、現在多種の美容バック料が市販され、又、身近な材料を用いての美容バック料の調製法が各種刊行物に記載されている。

しかしながら、そのいずれの方法も泥状のバック料を顔面に塗布し、乾燥させた後、洗い流すか、剥がし取るものである。

バック美容法がこのように優れた美容法でありながら、未だ充分に利用されていないのは、この

泥状物を塗布する作業が手間取ること、及び乾燥するまで口がきけないこと等の使用に伴う煩雑性に原因がある。更に、卵、果汁等の身近な美容料を利用して、家庭内でバック料を調製するには、うどん粉等と共に混練する必要があり、このようなバック料は調製に手間取り、保存性がなく、洗顔に手間取り、現実の使用にあたって各種刊行物に推奨されている程容易なものではない。

本発明者は泥状物を顔面に塗布することなく、容易にバック効果の得られる方法を研究し、柔軟なフィルムに皮膚に無害な糊料の乾燥した薄層、或いは糊料粉末の分散した薄層を設け、両目、鼻孔部及び口唇部に該当する相互配置より拡大された相互配置を保って開口部を穿設することにより、それを濡らして、或いは洗顔後の濡れたままの、或いは薬効成分を含む基礎化粧品を施した顔面にあてがうのみで顔面に密着し、バック効果を発現する簡易に使用できる美容バック材を完成するに至った。

本発明によれば、特殊の薬効成分を用いなくと

も簡易な手段で充分なバック効果を得ることが出来る。更に、必要に応じて好みの薬効成分を含有する食品、薬草エキス、薬剤等の天然の有効成分含有物を顔面に塗布して用いれば、好みの相乗効果を期待することができる。更に、顔面全体を被覆しえない、任意の形状に切断された小片を用いれば、頬、目の周囲、口唇部の周囲等局部的に肌の荒れが著しいときには顔面全体でなく、必要な部位のみに美容バックを行うことができる。

以下、本発明を詳細に説明する。

本発明に係るフィルムは5～50 $\mu$ 厚、好ましくは8～20 $\mu$ 厚である。厚すぎると顔にしなやかに密着しない。素材はポリアセテート、ポリブタジエン、アイオノマー、ポリアミド、ポリ塩化ビニリデン、エチレン酢酸ビニルコポリマー、ポリ塩化ビニル、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリエステル等のプラスチック素材をそのまま用いるか、或いはこれら非通気性素材にランダムなやすり状粗面を押圧して微細な穿孔を多数穿設し、通気性を付与してもよい。又、親水性プラスチック

として、ポリビニルアルコール、エチレン酢酸ビニルコポリマー等も使用できる。更に、紙複合体、紙加工物も可能であり、セロハン紙、洋紙繊維、織布、和紙繊維や繊維状プラスチックを薄い紙状にしたもの、或いはこれに薄くプラスチック被膜加工を施したもの等、通気性、非通気性の薄く柔軟なフィルム状物はすべて使用できる。

通気性のフィルムは顔面に密着させた後、濡れてペースト化した糊料が乾燥するにつれ皮膚に緊張を与え、バック効果を促進する。一方、非通気性のフィルムは濡れてペースト化した糊料の乾燥はないが、皮孔の拡大、皮脂の分泌及び蓄積の効果が高まる。

フィルムに設ける穿孔は目、鼻孔部、口唇部共、現実の開口部又は裂部より大きいことを要する。これらの部分に少しでも被さると、不快感や呼吸困難感が増大する。両目は各独立の穿孔を設けてもよく、場合によっては連続した穿孔であってもよい。2個の独立の穿孔を設ける場合には、目と目の間隔は現実の間隔より広くとることが望ましい。

鼻は両鼻孔がまとめて入る大きさの1個の穿孔で充分であり、目と鼻孔との間隔も現実の間隔より広くすることが望ましい。口に関しては、現実の口唇裂部より大きな穿孔を鼻孔と口唇との現実の間隔より離して設ける。

このように、現実の開口部又は裂部より拡大された配置をとる理由は、顔面には複雑且つ深い凹凸があり、美容バック材はこの凹凸の隅々にまで密着するものであることを要する。本発明はフィルム素材に顔面の凹凸に完全に倣う伸縮性を求めるものではなく、フィルムの柔軟性と密着性に加え、糊料の溶解による潤滑性により、部分的に整よせを行い皺を生じさせて結果的に顔面の凹凸と一致する形状を得るものである。したがって、本発明美容バック材を使用するにあたっては、両目、鼻孔部、口唇部に穿孔を一致させ、大きすぎるフィルムは整よせを行って皺にしておけば裏面に塗布した糊料の粘性により、顔面の凹凸に倣って密着し、バック効果を発現する。

又、顔面の一部が特に肌あれている場合には、

その部位に合わせた大きさの小片を使用することも可能であるが、この場合もバックを必要とする部位より大きめの小片に対応開口部、裂部より大きめの穿孔を設ける必要がある。額部、頬部のみの場合は、穿孔は不要であることは言うまでもない。

美容バック材の外観としては透明なもの、或いはスカイブルー、ピンク、肌色等にわずかに着色した半透明、或いは繊維性の紙、布様の感触を有するもの等がよい。

糊料としては、わずかの水分により、粘着性を発現する皮膚に無害な親水性糊料があり、例えば、 $\alpha$ 化澱粉、ポリアクリル酸ソーダ、CMC、メチルセルローズ、ゼラチン、カゼイン、アラビアゴム等が挙げられる。又、やや粘性が不十分ではあるが、ポリ塩化ビニルやポリエチレンと親和性があり、非水溶媒に溶けるものとしてポリビニルピロリドン、ポリアクリル酸その他がある。このような糊料をフィルム的一方の面に塗布、噴霧、含浸或いは付着させ乾燥して得られる美容バック材

を濡らして又は濡らした顔面に使用する。

又、親油性糊料を用いた場合は、洗顔後、たっぷりと油中水型エマルジョンの乳液、クリーム等を施した顔面に密着させる場合に適している。

上記の $\alpha$ 化澱粉、ポリアクリル酸ソーダ、CMC等の糊料は粘性が高く、少量用いても、微量の水があれば充分な粘性を発現するので望ましい糊料であるが、通常使用されるプラスチックフィルムは一般に疎水性であるため、その水溶液を薄層として均一に付着させ難いので、ポリビニルピロリドンのように高価ではあるが、アルコールのような疎水性フィルムと親和性のある溶媒にも、水にも溶解する糊料の低濃度のアルコール溶液に上記高粘性の糊料を懸濁させ、これをプラスチックフィルムに塗布又は噴霧させれば、これら糊料の少量を確実に付着させることができる。

或いは、各種繊維に少量の糊料をすきこみ、薄紙状とし、この薄紙をそのまま用いるか、或いはその一方の面にプラスチックの薄層を積層してもよい。

以下、実施例を挙げて本発明を具体的に説明する。

#### 実施例 1

低密度ポリエチレン製の10 $\mu$ 厚のフィルムを用い、0.5%ポリビニルピロリドンのイソプロピルアルコール溶液に3%の200~300メッシュのポリアクリル酸ソーダ粉末を懸濁させた液を塗布した。付着されたポリアクリル酸ソーダの量は1 $\mu$ あたり7gであった。イソプロピルアルコールを蒸発させた後、1枚毎に台紙を挟んで50枚重ね、縦30cm、横25cmに切断し、両目、鼻孔部、及び口唇部の相互配置より拡大された部位に現実の両目、鼻孔部、及び口唇部よりやや大きめの穿孔を設けた。

使用にあたっては、洗顔後の濡れた顔に、糊料の厚層の側を顔に向けて張りつける。プラスチックフィルムは薄く柔軟であり、しかも水分により糊料が潤滑性と粘性を発現しているため、フィルムを局部的に任意の位置にずらして密着させることができた。穿孔は現実の両目、鼻孔部、及び口

唇部の相互配置より広いため、贅よせしながら現実の両目、鼻孔部、及び口唇の位置にずらすと、局部的に皺が生じて本発明の美容バック材全体の形状が、各個人の顔の鼻の隆起、頬の膨らみ、目や口の周囲の凹凸と一致する。又、皺の部分は糊料の粘性によりフィルム同士が接合した状態となる。このままの状態に入浴、その他の日常の作業が可能であり、一定時間放置後、フィルムを剥がすと容易にはがれ、洗顔によりバック後の爽快感が得られた。

場合によっては、任意の美容料、例えば卵白、卵黄、全卵、果汁、牛乳、アロエエキス、栄養クリーム等を顔面に塗布し、次いで美容バック材を貼着するとこれらの美容料の表皮組織への浸透が促進され、相乗効果が得られた。

#### 実施例 2

約15 $\mu$ 厚のブレーンのセロハン紙に $\alpha$ 化澱粉の6%水溶液を50g/ $\mu$ 塗布し、乾燥した後、実施例1と同様にして美容バック材を製造した。

本実施例においては、使用時湿潤したセロハン

紙が寸法変動性と通水性を有するため、バック材を顔面に密着後糊料が乾燥し、それに伴う寸法収縮も加わって皮膚に緊張を与えた。乾燥しているため、剥がすにあたり多少の抵抗があった。

#### 実施例 3

薄い和紙1 $\mu$ あたり10gの割合にアラビアゴム微粉末をすきこみ、実施例1と同様に台紙をはさんで積み重ね、両目、鼻孔部、及び口唇部用の穿孔を設けた。実施例1と同様に顔面にあてて使用すると、実施例2と同様の効果が得られた。

特許出願人 旭化成工業株式会社  
代理人 弁理士 鈴木 定子

#### 手続補正書

昭和59年5月22日

特許庁長官 若 杉 和 夫 殿

#### 1. 事件の表示

昭和59年特許願第21965号

#### 2. 発明の名称

美容バック材、その製法及び使用方法

#### 3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 大阪府大阪市北区堂島浜1丁目2番6号

名称 (003) 旭化成工業株式会社

#### 4. 代理人 ㊦150

住所 東京都渋谷区桜丘町29番31号

清桜ハイツ 601号

氏名 7804 弁理士 鈴木 定子

電話 03-463-5046 番



#### 5. 拒絶理由通知の日付 自発

#### 6. 補正の対象 明細書の発明の詳細な説明の欄

## 7. 補正の内容

(1) 明細書、第13頁11行に次文を挿入する。

## 「実施例4

厚さ5 $\mu$ のブレーンのセロハン紙と洋紙繊維との複合体(約10 $\mu$ 厚)の紙繊維側に、0.5%ポリビニルピロリドンのアルコール溶液に3%の200~300メッシュのポリアクリル酸ソーダ粉末を懸濁させた液を塗布した。付着したポリアクリル酸ソーダの量は1 $\text{m}^2$ あたり約10gであった。アルコールを蒸発させた後、1枚毎に台紙を挟んで50枚重ね、縦30cm、横25cmに切断し、両目、鼻孔部、及び口唇部の相互配置より拡大された部位に現実の両目、鼻孔部、及び口唇部よりやや大きめの穿孔を設けた。

使用にあたっては、美容バック材を水に浸漬し、紙繊維の側を顔に向けて実施例1と同様にして張りつけた。

本実施例においては、フィルム素材が紙繊維とセロハンとの複合体であるため、湿り気によりカールしがたく、前もって水に浸漬しても顔面への

貼に差し支えない程度の剛性を保持し、水分がフィルム全面に速やかに、均等にいきわたる張所を有する。しかも紙繊維は肌ざわりがよく、使用中の不快感が少ない。顔面に密着後、水分は紙繊維及びセロハンを透過して蒸発し、それに伴う5%程度の寸法収縮も加わって皮膚に緊張を与えた。剥がすにあたり多少の抵抗があり、バック後の爽快感が残った。」

以上